

第一問 『長い読書』 島田潤一郎（全学部共通）

【模範解答】

問一 a 酸 b 紹密 c 完璧 d 凝 e 嫉（妬）

問二 作品には明確な結末や筋立てが存在する前提で、作家はそれに沿った文章を緻密に構成していくものだという考え方。

【解き方】

直前の「エンターテイメント小説」の特徴をまとめれば良いが、あくまで例示であるため結末が準備されている点のみを記述するのではなく、「先生から教わった小説」の特徴を反転させる意識で記述すると良い。

問三 クンデラの指摘は、生とは事前準備も自己理解もできない一過性のものだという考え方を示し、人生とは意義や目的を有しており、そこを目指して生きるべきだという作者の価値観に大きく異なる側面を持つていた点。

【解き方】

クンデラの引用の一般化はさほど難しくなく、傍線部の前数行から適当に記述できる。問題は解答のアウトライン（骨組み）の作り方。名詞形の傍線部はSVの形に置き換えて記述すると良い。

問四 言語化された自身の経験が他者に受容されれば、経験は再認識されるという意味で終結するが、他者がそれに疑問を呈した場合は、改めて過去に対する意味付与を行う必要が生じるということ。

【解き方】

答案に対比のかたまりを盛り込むことで得点向上が見込めるなどを知つておこう。今回の傍線部は「終わるはず」・「終わらない」と2つのかたまりに見ることで各所の説明が可能となる。比喩性の高いフレーズであるため自身の言葉で一般化することが求められている。

問五 経験の単なる伝達ではなく、被伝達者にもその経験世界を作ると同じような情感で共感させ、またその世界を長期間記憶に留めさせようとしている。

【解き方】

容易な問題。傍線部の後ろ数行の2点を記述するのみである。分量要求を満たすために対比ブロックを配置している。

問六 自身の経験を前提に物語における人間性や生活を想像し、そこに見受けられた共通性を人間の本性を起点とし、改めて自身の人生を合理的かつ真剣に解釈しようとすること。

【解き方】

傍線部そのままの「さまざまのこと」の十分化に徹すれば、答案のピントを合わせやすいだろう。

問七 友人の記述した小説描写は、顔色や声以上に彼らの内面や経験が表象しており、作者はそれらの世界を自らの生活と重ね合わせて理解してきたから。

【解き方】

問六と関連させて考察するとわかりやすい。傍線部内「小説のシーン」と「顔色・声」を比較したときに、前者は作者自身の人生世界と重ねあわせる形で反芻されていると理解しよう。

問八 結末が決まり切っていない人生を歩み、その経験を他人の記憶に残るような言葉を用いて伝達する中で自らの記憶を再認識ならびに意味付けられるようになり、一方で他者の小説に描かれた世界を自らの人生に照応させる中で人生に対する合理的な意味付けができるようにもなり、小説を人生内省の端緒と捉えるようになった。（147文字）

【解き方】

最終設問は全体要約と考えてピントの定まらない答案に陥るリスクがあるので、①与えられた傍線②問い合わせ（何を十分かするべきか）を確認し、記述の核となる情報を準備することが肝要だ。今回は「波線部の真意」を記述する要求であり、これはすなわち「小説をきっかけに“何を”考えるのか」を十分化することに他ならない。作者の小説への関わり方は「インプット」と「アウトプット」の両面で説明できることに着眼すれば答案は安定する。

第二問 「貝合」（文学部・法学部）

【模範解答】

問一 a 存続の助動詞「り」連体形 b 強意の助動詞「ぬ」未然形 c 使役の助動詞「す」連用形
d 推定の助動詞「めり」終止形 e 完了の助動詞「たり」連体形の一部

問二 ア あらかじめ探すことなどはするつもりがない イ ふさわしいようなもの
ウ どうにかしてこちらの姫君を勝たせたいなあ エ 負けさせ申し上げてはいけませんよ
オ 並々ではなくすばらしい

【解き方】

オのような慣用表現には難しいものが認められるが、前半のほとんどは基礎単語・基礎文法の範疇で処理できる。助動詞や助詞などは正確に暗記して得点に直結させられるようにしておこう。

問三 (1) a (2) b

(3)

姫は貝合のための貝がなくどうしようもないと何故嘆いていらっしゃるのか、

そのような必要は全くない。なぜなら白波が貝を持たないあなたのもとに寄せ付ける

ように、私も海の如く深い思いをあなたのもとに寄せ、手助けをするつもりなのだから。

【解き方】

和歌の解釈はシスティックに手順を踏むことができる。まずは「かひなし／なげくらむ」、「白波／寄せてむ」と二文構成になっていることを把握する。（2句切れ）「甲斐なし

（＝どうしようもない）に「貝なし」の意味が控えていることを発見できるかが肝である。

掛詞を正確に把握するためには「詞書（ことばがき）（＝前提文脈）」をよく確認する。

問四 童たちが祈願したこと、観音が姫君を慮る和歌を仮現として詠み表したと考えたから。

【解き方】

間に適う理由事情をピックする。詠み手がわからず細い声の和歌を耳にしたからである。

問五 ありがたい観音の仮現とはいえ、日常的ではないものを目の当たりにして恐怖を覚えたから。

【解き方】

童たちは観音が和歌を詠んだと錯覚し、二通りの反応を示している。逃避の心中は

傍線部直前の「恐怖」だが、その内実を自然に具現できるかがポイントだ。

問六 仏

問七 貝が多く入った州浜を見つけた子供たちが、仏から姫君へのご利益であると誤認し

以上に騒ぎ立てていることが滑稽にも面白くも感じられたから。

【解き方】 童たちが作品後半で一貫して有している誤解と、それに対する男君の捉え方を

傍線部直前から丁寧にまとめれば良い。

問八 d

第三問 「説苑」（文学部・法学部）

【模範解答】

問一 a それ

b もし

c のみ

d なほ

e いはんや

【解き方】古文と同様に文法書レベルの基礎語彙、句法が問われる所以完答出来るようにしよう。

問二 今あなたの容貌や立ち振る舞いを見るところ、あなたは愚人ではありません。どうしてあなたの愚かさを根拠としてこの谷川に「愚公の谷」と名付けたのですか。

【解き方】変換の難しい漢字や構文はないが、そのまま直訳をとると要素不十分となり不自然な日本語になる。一文目は後半に対応する主語を明記し、二文目は「公」「名之」のそれぞれを十分化することが求められている。

問三 オ

【解き方】傍線部前の主人公と少年たちのやり取りを適切に把握することが前提。少年たちは牝牛が仔馬を生むことがないとの主張を突き付けて仔馬を奪っているが、そもそも金錢を経由して牝牛が仔馬に代わっているのだから反論できたと読む。また少年の理不尽な主張（生むはずがないから頂戴する）を看過している点も、傍線部の評価の根拠であろう。

問四 牝牛が仔馬を生むはずがないという理不尽な根拠から、愚公が仔馬を少年に奪われたのは、訴訟が正しく機能する法制度が整備されておらず諦念を有したからであり、これらの状況は大臣である自らの為政の責任だと認識したから。

問五 安んぞ人の駒を取る者有らんや。

【解き方】反語を導く特定の疑問詞「安」「豈」などを認識することと書き下し法を正確に用いる。

問六 愚公 少年 駒

問七 オ